

# 子ども参加プログラム報告

## —多色摺り木版画の技法を伝える—

今西 彩子

はじめに

当館では平成 21 年(2009)に、日本画の画材や技法を子ども向けにやさしく解説した冊子『日本画を描いてみよう!』を刊行した。描法に関する清方の文章も収録し、子どもから大人まで広くご好評いただいている。平成 26 年(2014)度には、文化庁の地域と共働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業の一事業として英語併記版も刊行し、海外の 77 箇所の美術館や図書館のほか、国内 431 箇所の関連機関に送付した。本書は徐々に周知されつつあり、平成 28 年(2016)に海外での日本画ワークショップで使用された例もある。今後も日本画を伝えるためのツールとしての活用が益々期待される。

一方、多色摺り木版画の紹介についての構想は、『日本画を描いてみよう!』の企画段階から始まった。

鏑木清方は日本画家としてだけでなく、明治・大正に活躍した挿絵画家としても知られている。清方が挿絵を描いていた明治後期は、木版口絵の全盛時代であり、浮世絵の技術が発展を遂げながら新版画へ受け継がれた過渡期ともいえる。また、清方は川瀬巴水や伊東深水など、大正以降に新版画で活躍した弟子たちも育てた。さらに、木版職人の数が減り、技術の継承が難しくなってく昭和期に入ると、昭和 10 年(1935)に連作《註文帖》(昭和 2 年(1927)作)を多色摺り木版画にしたり、昭和 14 年(1939)には泉鏡花著『薄紅梅』の木版口絵の版下絵を描いたりなど、木版画の独特の味わいを好んだと共に、少なからず木版画の継承を意識していたといえよう。



薄美濃紙に描かれた下絵  
『薄紅梅』木版口絵(下絵) 昭和 14 年(1939)  
鎌倉市鏑木清方記念美術館蔵



『薄紅梅』木版口絵 昭和 14 年(1939)  
鎌倉市鏑木清方記念美術館蔵

当館は、清方の木版画に関する作品資料(下絵・校合摺・差上げ・校正摺など)を数多く所蔵し、各展覧会で紹介している。また、これまでの清方研究においてあまり語られてこなかった挿絵の画業を調査研究事業の大きな柱としており、多色摺り木版画の技法の普及は、長く主要な目標であった。

『日本画を描いてみよう!』の中で、木版画の制作工程は簡単に触れただけにとどまったが、より詳しく 1 冊にまとめようと、平成 27 年(2015)に企画・制作したのが『木版画の多色摺りに挑戦しよう!』である。

### 1 冊子『木版画の多色摺りに挑戦しよう!』の企画・制作

『日本画を描いてみよう!』では、読者の方に「実際に描いてみたい」と思っただけのような、制作への動機に響くことをコンセプトに企画した。そのため、写真図版だけでは一見判別のつきにくい雲肌麻紙や土佐

麻紙などの6種類の和紙や、絵絹2種類を見本として貼り、支持体の手触りを確かめていただくことで、日本画材に直に触れられるよう工夫を凝らした。

『木版画の多色摺りに挑戦しよう!』においても同様に、国内外の子どもたちに向けて多色摺り木版画の制作工程を易しく紹介し、さらに実際の木版画制作にも結び付けるというコンセプトから構想が始まった。

当初はまず、先に挙げた《薄紅梅》を復刻し、木版口絵として添付することで明治時代の挿絵の文化を読者に味わっていただくことを考えた。次に、清方が子ども向け雑誌『少女界』に寄せた口絵の墨版と各色版をトレーシングペーパーに印刷して綴じ込み、読者がこれを切り取り、版木に貼りつけ、墨版と色版の彫りと摺りを行うことで木版画の制作体験ができるようにと考案した。

《薄紅梅》口絵の復刻については、その制作工程の写真を掲載することにより、多色摺り木版画の制作方法を視覚的にわかりやすく紹介できたらという考えのもと、木版画制作の専門機関や専門家を訪ねた。しかしながら、一見すると色数が少なそうに思える《薄紅梅》は、実は何版もの色版と、それに準ずる摺りが必要であることを知らされた。それゆえコストがかかり、子ども向けの少部数且つ低価格の冊子としては調整が難しく、当初のアイデアは一時頓挫してしまった。

だが、やはり制作工程の写真は必要不可欠であるとの思いから専門家への相談を繰り返していたところ、新藤茂氏(国際浮世絵学会常任理事)をご紹介いただいた。新藤氏は、浮世絵コレクターであり、歌川国貞の画業を中心に調査を重ねてこられた研究者として広く知られている。そればかりか現役の彫師や摺師との交流も深く、古来の画材や技法の研究も手がけ、ご自身で木版画制作もされるという。そこで清方作品の復刻制作を含めた監修を依頼したところ、引き受けていただいた。

新藤氏の監修指導の下、本書のコンセプトがより明確化されていった。清方の挿絵作品のうち、線が比較的太く、色数の少ないものを調べ、子どもたちが彫りや摺りのできそうな《洗ひ髪》を取り上げた。そして、トレーシングペーパーに印刷する墨版と色版の図も《洗ひ髪》に統一し、当初の構想よりも実制作に沿うものとした。



表紙



紙面



新藤茂氏による彫り工程

本書では、江戸から明治に伝えられた技法を忠実に伝えることを重視した。そのため、例えば現代の学校教材で普及している三角刀は用いずに、切り出し刀を使っている。さらに、新藤氏による彫り、摺りの全工程を筆者が写真撮影し、図版では伝えきれない技法にはイラストを添えた。また、古来の技法をより詳しく紹介する「ワンランクアップ」コーナーでは、新藤氏の長年の研究成果を基にした新知見が随所に込められている。

本書の刊行後、国内における木版に関連する展览会や、フランスでの日本文化関連イベントで、訪れた人の手に取られたと聞く。今後、国内はもとより海外において、多色摺り木版画にますます注目が集まることが期待されると共に、本書がそのきっかけの一つになればと願っている。

## 2 子ども向けワークショップ「木版画の多色摺りに挑戦しよう！」

冊子『木版画の多色摺りに挑戦しよう！』制作中より、子どもを対象にした多色摺り木版画ワークショップの構想が始まった。当館の子ども向けワークショップは、平成 18(2006)年度から開始しているが、小規模館ゆえにワークショップ専用の部屋がなく、またスタッフの人数も少ない上に限られた予算の中で行っている。市民サポートスタッフの方々のご協力なしでは開催できない現状にある。こうした状況から、木版画制作の専門家を毎回招聘することができず、自力で継続的に開催していくことのできる仕組み作りが必要であった。

他の美術館・博物館での先行事例を調べ、担当した学芸員の方への取材を重ねながら、当館に合う方法を模索していくこととなった。

### 第1回 <平成 28 年度 夏>

#### 新藤茂氏（国際浮世絵学会常任理事）による監修と準備

先述したとおり『木版画の多色摺りに挑戦しよう！』で重視した点は、江戸から明治の技法を紹介することにあった。現代の学校教育において、伝統的な技法を教わる機会はほとんど無いに等しい。ゆえに本ワークショップの主眼を、古来の技法を体験することに置き、経験をとおして木版画への新たな鑑賞視点を培うことを目指した。この新規ワークショップの立ち上げにあたり、引き続き新藤茂氏に監修いただいた。

当館の子ども向けワークショップは、一回 1 時間 30 分～2 時間制で、多くの方にご参加いただくため、一つのイベントにつき、お一人一回限りの申し込み制としている。それゆえ、参加者に限られた時間内に作品を完成させてもらう必要がある。そこで、摺る体験を中心にし、彫る体験は小学校 3 年生以上の希望者に限り一人ずつ 5～10 分程度行うこととした。

主な制作が摺りであるため、参加者定員数である 12 人分の墨版・色版を作ることから準備は始まった。まず、以前から当館のワークショップに協力いただいている日本画家の方に、色数が 3～4 色となる原画を依頼し、「すいか」「ひょうたん」「ヒメサユリ」「さくらんぼ」の 4 種類の絵を描いてもらった。4 種類としたのは、1 台の作業テーブルにつき 4 名が着席するからで、計 3 台の各テーブルの中で 4 種類の絵を巡回させながら各参加者に 1～2 作品を摺ってもらうことにしたからである。

それゆえ、一つの絵につき 3 つの墨版と 9～12 枚の色版が必要となり、結果、4 種類の絵から 12 枚の墨版と 39 枚の色版を作ることとなった。

墨版と色版は古来の技法に即して制作し、薄美濃紙に版下絵を描き、これを版木に貼りつけて墨版を彫り、校合摺から各色版を作っていた。



摺り上がり



墨版(ひょうたん)



色版(ひょうたん)



色版(ひょうたん)

日時:平成 28 年(2017)7 月 21 日(木)、8 月 18 日(木) 13:30~15:00

対象:小・中学生、高校生

参加者数:7 月 21 日 9 名、8 月 18 日 12 名 計 21 名

準備したもの:「すいか」「ひょうたん」「ヒメサユリ」「さくらんぼ」の墨版(ベニヤ板)12 枚、  
色版(ベニヤ板)39 枚、鳥の子紙、やまと糊、水彩絵の具、筆、刷毛、筆洗、  
絵皿、パレット、雑巾、彫刻刀、バレン、版下絵、版下絵が貼られた版木

### ワークショップ当日の流れ

プログラム当日は、まず展示室内で清方の多色摺り木版画を鑑賞しながら、情報伝達的手段として木版技術を用いた印刷物が生まれたことや、木版画の独特な線や色についての対話型鑑賞の後、新藤氏による摺り実演を行った。その後、各テーブルに分かれ、各参加者が鳥の子紙に摺っていった。また希望者は新藤氏の指導のもと、彫る体験も行った。



新藤氏による摺り実演



見当を合わせ摺る



彫り体験

### アンケート結果の概要

本ワークショップに参加した子どもたちや保護者からは総じて高評価を得た。満足度を尋ねた設問に、参加者の 96%が「楽しかった」と回答している。その理由として、「うまくできたから」「学校でやる版画と違って良かったから」「色をぬる順番や、うまくぬるコツ、糊を入れると良いなどが良く分かったから」などが挙げられた。また保護者に向けた同質問は、「楽しかった」という回答が 100%であった。また、その他の感想として「小さな子供たち向けにこのような門を広げてくださると大変有難く、とても有意義で嬉しい企画です。未来を見据えた素晴らしい取り組みだと思います。」「鏨木清方は日本画のイメージが強かったのですが、木版画の原画も多く手掛けていたことを知り興味深かったです。(中略)彫師、摺師達の技術に脱帽です。」などといった声があった。

### 展示

本ワークショップで制作された子どもたちの作品を、鎌倉駅の地下道ギャラリーにて同年 9 月 13 日(火)~19 日(月・祝)まで展示した。それまでは、日本画の子ども参加プログラムで制作した作品を飾っていたところに木版画作品が加わり、にぎやかな展示となった。



### 第 2 回 <平成 29 年度 夏>

日時:平成 29 年(2018)7 月 21 日(金)、8 月 3 日(木) 9:30~11:30

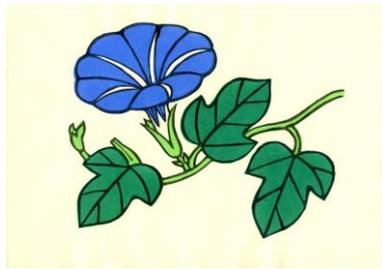
対象:小・中学生、高校生

参加者数:各日 12 名、計 24 名

## 準備

第2回目となる本プログラムは、1回目と同じ趣旨により開催した。ただし、1回目で使用した「さくらんぼ」を「朝顔」に変更し、新たに3枚の墨版と12枚の色版を準備した。

また、初回の新藤氏による実演から学び、この回から学芸員が摺りの実演を行い、市民サポートスタッフの方々の協力を得て開催した。



墨版



色版

## アンケート結果の概要

第2回目のアンケート結果も引き続き高評価であった。子ども向けに満足度を尋ねた質問には、92%の参加者から「楽しかった」の回答を得た。その理由として、「木版をやったのが初めてだったし、上手く出来たから」「バレンで摺るのが楽しかったから」「今まであまり多色摺りについて知らなかったので良い勉強になったから」などが記された。また保護者に向けた同じ質問からは、「楽しかった」との回答が100%となった。理由として、「実際に目で実演を拝見することができ、多色摺りが良く理解できました」「学校ではやったことのない版画で、良い経験になると思う」「同じ版でも人が違うと作品も変わるの面白い！と思いました」などが挙げられた。

## 展示

本プログラムで制作した作品を、平成29年9月12日(火)～9月18日(月)まで鎌倉駅地下道ギャラリーにて公開し、展示期間後、各参加者に返却された。

## おわりに

近年の小学校の図画工作科や中学校の美術科の教科書を繙くと、日本画は言うまでもなく版画の技法もあまり紹介されていないことに気づく。多色摺り木版画の制作に近いものとして、一版に一色ずつの彫りと摺りを繰り返して多色摺りにしていく手法が取り上げられていたが、バレンではなくローラーが用いられていた。学校教育の時間的制限のあるカリキュラムの中で、日本の版画を伝えることは難しい。だからこそ、美術館の教育普及事業では、手順を何一つ省かない本来の多色摺り木版画の技法を紹介することが重要であると考えた。体験してみることは、観ること以上に気づきを与えてくれる。先に挙げたアンケート結果からは、子どもたちの新たな発見が垣間みえよう。

美術館・博物館における浮世絵の展覧会は現代でも根強い人気がある。今後は子どもだけでなく、一版向けにも広く紹介する機会が期待されると考えている。

(鎌倉市鏑木清方記念美術館 学芸員)

冊子・子ども参加プログラムに多大なご協力をいただいた方々に、この場を借り深く感謝申し上げます。

冊子・子ども参加プログラム監修 新藤茂

冊子製作協力 松原美智子、三澤佳子、寺島澄夏

サポートスタッフ 三澤佳子、津久井由起子、圓佛皖司、松村武久

©根本章雄

(敬称略)